

小十郎と千代 (2)

松永ひろし

2021.6

〈目次〉

おもと	2
るうばい	3
ふくじゅそつ	4
三枝九葉草	5
雪割草	6
トンビとタカ	7
水の中の花	9
いいがかり	10
虫の声	11
木枯し	12
みそつかす	13
わら杓	14

【おもな人物】

桜木小十郎 十九歳。真一刀流免許皆伝。自宅に道場があり、齋藤又右衛門道場と荒木清右衛門道場で代稽古を行う。幼いころ、姉と草花遊びに興じ、草木に明るい。

齋藤千代 五歳。齋藤又右衛門の孫娘。おかつぱ頭。気ままでわがまま

武藤早紀 五歳。芝浜町に住む千代の遊び友だち。瓜実顔につぶらな瞳。髪を真ん中から左右に分けている。

たね 齋藤家住み込みのお手伝い。大畑村の百姓の娘。歳は九つ。小太りで色黒。

天誉和尚 金剛寺住持。千代の催促でタラヨウの葉をむしりすぎた小十郎を叱った。

鶴吉 七歳。堀江町の魚屋の息子。近所の子どものたちの親分を自認している。

早太 小十郎道場の門弟。八百屋。

達吉 小十郎道場の門弟。魚屋。

おもと

あたり一面、雪が一寸ほど積もっている。

十九歳の剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が飛び出た。千代は五つ。気ままでわがまま。小十郎が又右衛門を師と敬うを幸いに、平気で小十郎に無理難題をいう。

「じゅーじゅー あかいみじゃ。あかいみを見つけたぞ」

千代が興奮していった。小十郎は訊いた。

「どこにありましたか」

「うらぎどのてまえの おおきなくさの はからとびでておった。あれはなんじゃ」

小十郎は千代について横木戸をくぐり又右衛門屋敷の庭に入った。裏木戸手前の、雪が積もって下に押された青い葉の横から赤いかたまりがはみ出てい

た。それは赤く小さな丸い実が集まったものだった。

「お千代さま、おもとです。おもこの実です。」

「おもこのは、いかなるものじゃ。」

「漢字で万年青」と書きます草で、葉は枯れず、一年中青々としておりますゆえ縁起ものとされます。葉や実が珍しいものを、熱心な愛好家たちが高値で売り買ひするものです。」

「この あかいみは たへられるのか」

「わかりません。わからない物はやたら口に入れるべきではないとわたしは思います。」

「ためしに たべたら びっくりするほど おいしくてもか」

「はい。無茶は、すきではありません。」

「じゅんじゅん ためしに たべてみないか」

「勘弁を。お千代さま、ちゅうご雪が積もっています。雪を集めてウサギを作り、オモトの赤く丸い実をウサギの目としてはいかがでしょうか。」

「よきかんがえじゃ。みみは ちゅうご。」

「矢竹の葉がよろじにかん。」

「よごぞ。じゅんじゅん ちゅうごをちゅうご。」

「承知いたしました。」

試食の難を逃れ、安堵した小十郎であった。

さつぱい

寒風が吹いた如月の二十日。剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。その千代が小十郎に訊いた。

「じゅんじゅん あのはなは なんじゃ。」

「あの花はいずれの花でしょうか。」

「じゅんじゅんの かわのはなじゃ。」

「こんな寒い時期に咲く花があるのですか」

「さうでしたぞ。はなは きいろで ちいさくてあまい いいにおいが してました。」

「はて、小十郎はわかりかねます。」

「じゅんじゅんの おしゅうに きいてまいね。できなれば ひとえだ もらうてまいね。」

金剛寺に赴いた小十郎は本堂正面左傍にある五尺ほどの木から甘く香しい匂いが流れてくるのに気づいた。枝を見れば小さな黄色い花が下向きにたくさん開いている。

(お千代さまが話したのはこの花に違いない)

と感じた小十郎は庫裏に天普和尚を訪ねた。

「あれか、あれは臘梅じゃ。」

と上がり框で天普和尚はいった。

「もとは海を隔てた清国の木だそうだが、寒い今の季節にとってもよい香りの花を咲かせるので、武家や寺から引き合いが多いと植木屋の勘助がいつておった。」

小十郎は恐る恐る訊ねてみた。

「和尚さま、申しつらのですが、花のついた枝をひとつ、頂戴できませんか」

「ふふっ。あのタラシヨウ娘がそう願ったか」

天普和尚は奥に戻り、鉢を持って庭に出た。花が八つほどつく枝を切り、枝の根元を鉢で一寸ほど割ると、小十郎に手渡して告げた。

「臘梅の花は触れるとすぐ落ちてしまふ。触らず花の姿と香りを楽しむよう、タラシヨウ娘によく言い聞かせることじゃ。」

小十郎は苦笑いして頭をかいた。そして、承知いたしました。ありがたうございませう。」

ふくじゅんじゅん

三月。剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。千代が庭を見ていった。

「おっ、ちゅうじゅんのかわでも ふくじゅんじゅんがさいたな。じゅんじゅん たねが はなしたぞ。あたしやまには ふくじゅんじゅんがこっぱいさくよががあるって。」

「たねがですか。そういえばたねの在所の大畑村は田んぼの畔にたくさん福寿草が咲くことで知られて

いますね。たねは福寿草には格別の思い入れがあるのじゃあね」

「じじゅうろう あたしやまのふくじゅうそつをみたし おもわんか」

「お千代さまは見たいのですか」

「みたい。どれほどのかすか みたい」

「わかりました、探しに行きますか」

浅間神社の南で寺沢にかかる丸木橋を渡り、金剛寺参道への分岐を直進すると、その先の左手に二尺あまりの石地蔵が祀られている。その右脇の径が愛宕山頂への登山道だ。

「じじゅうろう あたしやまに ちよが ふくじゅうそつを みつけようぞ」

というや、千代は山道を駆け登った。

「お千代さま、福寿草は道のそばにあるとはかぎりません。林の奥もよく見て下さい」

というて小十郎は注意深く右左の奥を探りながら一足一足登った。すると、

「じじゅうろう あった あったぞ」

で、小十郎はじじじも付きそつ。

千代が細枝の先に垂れる、薄黄色の小さな丸い花の連なりを目をとめた。

「じじゅうろう これは何なじゃ」

「キノシの花です」

「じじ。おなむらひごとく かかわりあるのか」

「じじいおせん。お千代さまの母上はお齒黒を仕上げおこじゆすね」

「じじ。仕上げこのぞ」

「お齒黒は材料に ぶしとじじいものを使います」

「この木の実が ぶし の代わりに、お齒黒の材料となる木ゆえ、キノシなのです」

「ええのちかくのやまに おほくらの もとがあるとは おごろいな」

「お齒黒だけではありません。花や実や枝や根が、たぐもや葉や鞘や染料などになるものが、この山にまたぐさんあるはずですよ」

「たぐえは じじい」

小十郎は辺りを見回した。そして、

とびはねるような千代の声が聞こえた。

そこは若い落葉松がまばらに生えた南斜面で、積もった落葉松の葉を押しつけて福寿草が黄金色の丸い花をいちめんに広げていた。

「ほお、見事です。陽を受けて花がキラキラしています。皆に教えたいですね」

すると千代が声を荒げた。

「だめじゃ。じじは ちよだけの ふくじゅうそつじや。よいな。だれにもいうな」

三枝九葉草

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままにわがまま。

「じじゅうろう あたしやまに いくぞ」

福寿草の群落を見つけて以来、千代は愛宕山に行きたがる。千代一人を山に行かせるのは不用心なの

「お千代さま、じじいヨモギがあります。今時の葉は草餅になりますし、成長したら乾かして白い繊維を集め、お灸のもぐさにします。小十郎は腰がイバラの刺で傷ついたとき、この葉を揉んで汁を出し、血を止めました」

「ぢぢめなのか。おほえておく。ところで かたわらのそのはなは なんともうすか」

「三本の枝の先に三枚ずつ葉がありますゆえ 三枝九葉草かと……」

「おもしろみのない なまえたな。はなは こんなにかわいいのだから じじゅうろう かわいいなまえを かんがえてやれ」

雪割草

「じじゅうろう このはなは なんなじゃ」

愛宕山の山頂近くの雑木林で、千代が落ち葉の上の花を見つけた。径五分ほどの白い六弁花が淡褐色の細く短い茎の先についている。小十郎は初めて目

にする花だった。

「初めて見る花です。なんでしょうか」

「おし」「じゅじゅじゅがしらぬ はながあったぞ。ゆかいじゃ。「じゅじゅじゅ わかるまで かんがえよ」

「考えて分かるものではありません」

すると、小十郎は近づくと足音を聞きとめた。

「お千代さま、山を下りくる人がいます。この花を知っているか訊ねてみましょう」

落ち葉を踏んでやってきたのは、丈四尺あまりのほっそりとした初老武士だった。

小十郎は、とても花の名など知っているとは思えない風体と見たが、訊いてみると千代にいった手前、声をかけた。

「突然失礼いたします。わたくしは齋藤又右衛門道場の桜木小十郎と申します。又右衛門さまお孫のお千代さまに、この花の名をたずねられましたが、わたしは知りません。「存知ならば、お教えいただけませぬか」

「この花じゃ。ん？ 洲浜草だな。もう咲いたか」

「スハマンウ？ ですか」

「そうじゃ。三つに分かれた葉の形が家紋の洲浜と似る「よから名」ついたという」

「ありがとうございませぬ。もう咲いたかといわれましたが、洲浜草は早咲きなのですか」

「雪割草の別名をもつほどに」

今まで黙っていた千代が口を開いた。

「おじい よくしってるな。なぜじゃ」

「嬢ちゃん、爺は目につくものは何でも知りたいと思っ性分です。調べたのじゃ」

「しらべてわかるのか」

「分かるまで調べる。先人が遺した書物などをあさつてな。分かったときは、頭の中をおおっていた霧がいちどにパツと消えるぞ」

武士は右手の拳で白髪頭をポンと叩いた。

トンビとタカ

洲浜草を教えた初老の武士が名のつた。

「わしは伊吹庄左衛門と申す隠居じゃ」

桜木小十郎はその名に聞き覚えがあった。亡き父がスズムシの飼育方法を教わった本草学者だと気づいた。洲浜草を知るも道理だ。

「庄左衛門さま、庄左衛門さまはむかし、わたくしの父、桜木十郎兵衛にスズムシの飼育方法を教えられた覚えはございませぬか」

「おお、覚えておる。十郎兵衛どのはスズムシの繁殖に長けたお方だったが、おしいことに亡くなられたなあ。そうか、十郎兵衛の「子息が。今時分、「のよつな所におるといっつのは、家を継いではおらぬのか」

「はい、家督は兄の長一郎が継ぎました。わたしは剣の修行をいたしております」

すると千代が口をはさんだ。

「おじい。「じゅじゅじゅは うちの けつじんぼうじゃ。めんきよかごての けつじんぼう」

「それは頼もしい。お役「たちましたかな」

「おじいは きよねん せんげんじんに ひと ねのいごでたはなせしを けつじんぼう」

「聞き及びました。まさか、その折りの？」

「ちよとさきちゃん が さらわれそつになつた。やつけたのが「じゅじゅじゅじゅ」

「十郎兵衛の「博識で「ぞつたが、剣は不得手でしたな。お子がさような剣術使いとは、トンビがタカを生みましかな」

「おじい。とんびがたかをうんだとは いかんことじゃ」

「まず、トンビが生むのはトンビでござる。それゆえタカを生むとは、普通の親から秀でた子が生まれたとの例えで「やい」

「おじい。ちよも たかになりたい。なにか よきほうほうはないか」

「ありますぞ。なにか一つでも、得意を身につける「ことです。小十郎どのは剣術。嬢ちゃんは何にいた「ますか」

「ちよは てんきひなごじゃ」

「いって千代は右足の草履を空に蹴上げた。

「おじい あすは はねこじゃ」

水の中の花

十九歳の剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気づいた小十郎が声をかけた。

「お千代さま、お千代さまは水の中で咲く花をこぞ存知ですか」

千代が応えた。

「しらん。なぜ それを きく」

「昨日、伊勢町の伊勢社に参ったおり、湧き水の流れの中で、水草にちいさな花がいっぱい咲いているのを見つけました。お千代さまがご希望ならば、こゝ案内いたそうかと」

「みずのなかで はながさくとは はじめてきいたぞ。みたいな つれていけ」

小十郎と表通りを歩いた千代は、途中、芝浜町の

武藤家で早紀を誘つて、早紀は喜んで一緒になった。伊勢社の社叢が家並みの向こうに見えだしたころ、千代が、

「じいちゃん このあたりの けしきを ちよは はじめてみるぞ」

といった。そこで小十郎は応えた。

「それは、お千代さまと一緒に遊ぶ鶴吉はこの辺りにこないからです。ここは鶴吉の喧嘩がたき、長吉とその仲間が遊ぶ町なのです」

「ちよつきちよらひは ちよと さきちゃんに いちわるせぬか」

「大丈夫です。花を見るだけなのですから」

ケヤキの大樹が社地を囲む伊勢社は、幅、奥行きとも一町あまり。真ん中に神明造りの本殿がある。湧き水は本殿の右後方にあり、わんわんと水を噴き出している。千代が、

「じいちゃん はなは どうじゃ」

「じいちゃん」

と小十郎は指差した。途端、早紀が見つけた。

「ちよちゃん あった。ちよちゃん はなだ」

「どい？ えっ！ ほんとだ みずのなかの はなだ。ちよちゃん ちよちゃん」

千代も早紀も、初めて目にする梅花藻に大興奮。

小十郎は二人に教えたことを喜んだ。

いいがかり

小十郎の家に、小十郎道場の門弟で八百屋の早太が駆け込んできた。

「先生、てえへんだ。達吉が浪人たちに因縁をつけられ、囲まれている。助けてくださいえ」

小十郎は素早く立ち上がり、刀をつかむと、

「早太、場所はどこだ」

「へえ、茅場町の辻で」

茅場町まで二町あまり。小十郎は全力で駆けた。すると道の先の地面に座り込んでいる達吉と、取り囲む五人の姿が見えた。

(間に合った)

と小十郎が思ったとき、浪人の一人が抜き身の刀を

振り上げた。瞬間、達吉は天秤棒を持って後方へ立ち上がり、そして身構えた。

「まてまてまてーえ」

叫びながら小十郎は輪の中に走り入り、達吉とならんだ。浪人たちが一歩下がった。

「この者はわたくしの道場の門弟だ。なにゆえ斬ろうとする」

と小十郎がいうと、背の高い痩せた浪人が、

「ぼてふりの桶が、武士の魂である刀の鞘に当たったので、謝罪と金子を求めたまでじゃ」

「ちがつ!!」

と達吉が叫んだ。

「その浪人が、自分の刀を桶にぶつけたんだ」

小十郎は、その浪人だという者を見た。小柄な男が、髭だらけの顔に不敵な笑みを浮かべていた。小十郎は達吉を見てうなずいた。そして腰を落して身構え、静かに言った。

「無礼を謝らず、金子も払わぬから無礼討ちとの理屈だが、達吉は無礼などないという。とどのつまりは、達吉一人で五人を相手することゆえ、師のわた

くしが助太刀いたす。

ところで貴殿たち、浅間神社にての人さらいの噂を聞いたことがあるか。人さらいたち四人が木刀で倒されたと聞いたことはないか。あの宵は木刀であったが、今朝は真剣でござる。それを承知でかかってこられよ」

浪人らは顔を見合わせた。そして、刀を鞘に収め、舌打ちして去った。

虫の声

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままにわがまま。その千代がいった。

「じゅらじゅら くらくなりはじめると むしがなきだすようになつたな」

「お千代さま、虫はいかように鳴いておりましたか」

「チチチツツって きこえたぞ」

「はて、どんな虫でしようね」

「さては 「じゅらじゅら」。なきねで そのむしがなにか ききわけできぬな」

「はい。もうしわけござませんが、分かりませんが、ただ、スズムシは、父上が飼っておりましたので鳴き音で分かります」

千代が訊ねた。

「スズムシとは かうことができるものか」

「はい。父上は糞の中で飼っておりました。卵を産ませると、翌年孵化します。スズムシはじつにたくさん孵化しますので、知りあいに分けたり、庭や草原に放つたりしていました」

「いまも かつておるか」

「父上は三年前の秋に他界しました。その時、わたしは剣の修行で西国にあり、兄上はお役所勤め。ともにスズムシの世話をすることができず、兄上は父上のお仲間と驚くと引き取っていただいたそうです」

「そつが、それは よかつたな」

「はい。でも、一昨年の秋に修行の旅から戻ったとき、以前でしたら夜半まで聞こえたスズムシの鳴き音がまったく消えており、父上亡くなったことの寂しさがつりました」

すると千代がいった。

「じゅらじゅらをおもいださせたな」

「えっ!？」

驚いた小十郎が千代を見ると、いま喋ったことなど忘れた顔で、鳴きはじめて「オロギを捕まえようとしているところだった」。

木枯し

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままにわがまま。

「じゅらじゅら きょうのかぜは つよくて つめたいな」

と千代がいった。

「木枯しでしようかね」

と小十郎が応えた。

「じがらしたと? なんじゃ、それは」

「初冬に北の方から吹く強い風です。木々の枯れ葉を吹き飛ばすので、木枯しとよぶのだそつです」

「んん じよいかぜだと かがが 「わいな」

「はい。なにかと火をあつかつこの季節、火の用心に「した」とはございませぬ」

「じゅらじゅらのいえは ひのしまつを どうしておる」

「竈、囲炉裏とも十分気をつけています。留守する時は、隣のおまさはあさまに火の始末を確かめてくれるようつたのであります」

「かんしんじゃな。ちよも ひには きをつけておるぞ」

「お千代さまが気をつける火とはいかようなものでしょう」

「あんどんの ひじゃ。ちよは ねぞうがわるいで、よ「おこてあつたあんどんを たおしたと

があつての。つんふく かごにはならんかったが。それからは ちよがねついたら ははづえに あんどんを へちからにけてもらつてある」「行灯をお使ごとは、せごたくですな」「へつごう」「わくつて ねむれたのじゃ」「お千代さまでま怖いものがあるのじゃか」「つまたはななじゃ。おはげや まのけは こわごぞ。ちよらはへらくなると だててくるから ちよは へちやをあかるくして ねむるのじゃ。ねてしまえば こわくないからな」

みそつかす

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。その千代がいった。

「うづまゝのうづまゝ おひねまが ここのや

ま」ちかじいたら すく」しずんでしまつよう」「かんじぬぞ」

「世間では、秋の陽はつるへ落としまうしておりまある」

「しるへおとすは、ちひつていじやうじゃ」

「しるへおとすは、わびいぢやぬ」

と小十郎は水を汲み上げてある傍らのつるへ桶を触り、しるへ繩をなでた。それからしるへ桶の横木を持ち上げて井戸の口に運ぶと、手を放した。

パシャン！

井戸の底から激しい水音が聞こえた。

「一気に落ちましたでしよう。秋の陽はそのように落ちてしまつたとえたのです。そこには早い日の入りを少し残念に思う気持ちもあるのだしょうね」

「そうだな。ゆっくり しずんでくれたら さらにいっばい あそべるのにな」

「お千代さまは、いま誰とどんな遊びをしているのですか」

「ちよちやんと ままじとしたり つるきちたちとおじいじやう」

「おじいじは、ちよちやとつらつら」」「せんげんじんじやう」

「浅間神社の境内はかなり広いですから、鬼になるじつかまえるのは大変ですな」

「おじは たいへんじや。でも ちよは おじにならん」

「えつ、なせですな」

「ちよは みそつかすだからじや。みそつかすはおまけみたいなものでな、ちよさいから おなさけで なかまに いれてもらつていゝのじゃ。おじにならなくていいけど なりたいきまももあるのじゃあじや」

わら查

師走。江戸に降った三度目の雪は朝、五寸ほどの高さに積もった。その日の午後、剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、後から小十郎目

がけて雪玉が飛んだ。小十郎は屈んでよけた。さらに雪玉が同時に二つ、小十郎むかつて飛んだ。小十郎は右に動いて雪玉をかわすと、振り返り、半開きの横木戸にむかつて声をかけた。

「お千代さまですな。出ていらつじやい」

木戸からニヤリとして千代が顔を出した。が、千代だけではない、後に早紀がいた。

「なんと、早紀さませいじいじやうでしたか」

すると千代がいった。

「そつじや。ふたりともいままで、せんげんじやで、しるきちたちと ゆきがっせんをしておつたのじゃ」

「それは勇ましい。が、お二人とも、だいぶ当てられたようで、頭の毛がぬれていますね」

「しるきちが、ちよとさきちゃんだけをねらつてなげよつたので、にげてきた」

「それは大変でしたな。さあ、手拭いで頭をお拭きください。お二人とも、赤い布で縁取つたわら查がお似合いですよ。どこぞで買ひもとられたのですか」

